

クリスマスマーケットを境に、すっかり真冬になった大地。劇的な季節の変わり目でした。子ども達の服装が一気に真冬日仕様と変わり、顔も鼻水たっぷり、ほっぺが真っ赤、吐く息が真っ白という光景になりました。久しぶりに、年内に雪景色となりました。

そんな中、皆様のエネルギーと底力を思いきり感じられたマーケットが、大盛況の中で終了しました。本当にありがとうございました。子ども達の日常の会話の中から、いろいろ相談して作られ、取り組まれている様子を、日を追う毎に強く感じられていきました。昨年よりも、構成メンバーが半分になりましたが、その作品数や段取りや当日の楽しそうな進行や笑顔やおもてなしは、最高で、特に大地ミニの方や外部の方からは、「素敵なマーケットを企画してもらいありがとうございます」という感謝のお言葉をたくさん頂きました。悪天候にもかかわらず、開店と同時に、たくさんのお客様が来てくださった光景は、久しぶりのものでした。本当に、保護者の皆様には、感謝申し上げます。そのお気持ちに、お答えすべくスタッフ一同、心を込めて子ども達に愛情を今まで以上に注いでまいりたいと思います。今年には本当にありがとうございました。来年も今年同様、よろしくお願い申し上げます。



## 【帰 還】

アコンガグア単独登頂。今、帰ってきたよ。2回アタックして、2回遭難した。6000mの最終キャンプに、天候待ちやらで、6日間滞在して、アタックの日は行き12時間歩いて、帰り11時間の23時間ぶっ通しで歩いて、最後の方は意識が飛んでた。頂上アタックの時の天候は、強風、吹雪、それに大量の雪、時には腰まで埋まるような雪の中をたった独り自分で道を造っていかなくちゃいけなくて、もう尋常じゃないくらい大変だった。頂上に着いた時はね、達成感っていうより、ああこれで終わったんだっていう開放感があった。これをやらなくちゃ前に進めない、俺が俺であるためには、この山に登らなくちゃいけないっていう使命感みたいなのがあったんだ。全ての荷物を自分でもって、最後のアタックは全ての道を自らで作ってたどり着いた頂上だ。もうめっちゃくちゃ嬉しい。レンジャーやお医者さん、警察の人たち、みんなもあの天候の中一人でよくやった、凄いでって祝福してくれたよ。知らなかったけど、最終キャンプに6日間滞在するのはありえないらしく、ベースキャンプでみんなすごい心配してて、俺のためにレスキュー隊も組織され始めていたんだってさ。何にせよ、やり遂げたよ。五体無事に元気に帰ってきました。ただいま。お父さんとお母さんの息子はここまで大きくなりました。すげえうれしい。もうやりきったよ。今、日本に帰る航空券見てる。お母さんの手料理や家族の雰囲気恋しいよ。6000mのキャンプで震えながら、どれだけ想像したことか。2011年 12月13日 青山雄飛

長男が1年8ヶ月前に、世界一周放浪に旅立って以来、11月初旬に、アルゼンチンに渡り、単独で南北アメリカ最高峰アコンガグア(6962m)登頂率30%(高度順応傷害のため)に挑戦すると言ひ、これを最後に、一旦、旅を終えるという連絡があった。荷物35キロのザックを背負い、荷揚げを2回に分けて2回往復しながら、高度をあげていくという。ベースキャンプから、1、2、3とキャンプを上げていくという。キャンプ地と言っても、なだれの心配のない何もない誰もいない雪原である

正直言って、12月から、1日たりとも長男を思わない時はなかった。旅立って以来、こんなに連日心配したことはなく、長男の小さな時の夢を何度も見たりしていた。妻ももちろんお菓子断ちをして、同じく心配していた。そして、12月12日の朝、無事帰還のメールが入り、涙を流し2人で抱き合った。

長男は、不器用でそんなにハングリーではなく、平々凡々と育ったような子どもであった。運動も勉学も特に突出したものではなく、中学高校と野球をしていたが、決して才能があるわけではなかったが、努力と継続を重ね、高校最後の夏は「なんちゃって4番」で輝いていた。

「こんな冒険やハングリーになるとは思っても見なかった」というのが家族や私たち両親の正直な思いである。(青ちゃんに似たとと言われても、完全に私のレベルを超えています) どうしてこうなったのだろうと考えてみますと、思い当たることは、

- ①お話や絵本で育ったからか、「ロビンソンクルーソー」が大好きな子ども(今でもそう)であり、ファンタジーの世界で育った事は確かである。
- ②生まれたときから、野外教室であちこち大きい人たちとむちゃくちゃキャンプをして歩いた。7ヶ月ごろ、たぶんハイハイしている頃日本海の砂浜でキャンプをして、大地で現在使用しているご飯を炊く羽釜を持って行き、お湯を沸かしてお風呂代わりにした。そして、高校生のお姉ちゃん達のいるテントにハイハイしていき、お姉ちゃんの下着を持ってきた(海水浴指導中のスタッフ)のは有名な話である。本人も、この野外教室は最高に楽しかったと述懐している。
- ③家や幼稚園に、とにかくおもしろい大人達が入り込んでいた。特に、おもしろい生き方をしている男性やお兄ちゃん達が入り込んでいて、いろいろな話を聞いていた。
- ④自分で言うのもおかしいですが、親は好きなことをやり、頑固に自分の価値観をおしきせてきたが、妻は、バランスよくフォローしてきたことが1番か。感謝

何よりも、6500mは人間が生きれる限界地点の少し前で、ただ一人でテントで6日間も孤独に耐え、アタックを待っていた力は何なのか。考える事は、家族や小さい頃からの思い出か。わたしも同じ状況にいたなら、同様に待っていただろう。家族や自分を愛してくれる人のことを思い。自分をいつも見守ってくれる人、(決して干渉したり、出過ぎたり、行く道の前を掃いたりする人ではなく)支えてくれる人、これは、生まれてから、しっかりとこどもと向き合い、時には突き放し、そして支える平衡感覚をもつ親が日々の暮らしの中で、地道に構築していくものだろう。

妻は、6年生の卒業時に、いろいろな小学校で、エチオピアの昔話「山の上の火」を話している。私の1番好きなお話である。おじいさんが、主人公のために、遠くから火を焚くお話。この中に、人を支える神髄があるという。

長男にいつ帰って来るのか、出発時と同じように、家族全員で成田空港へ迎えにいくとメールすると、大晦日の夕食までにおばあちゃん家へ帰るという連絡。最後まで、ヒッチハイクで来るのだろうと私は、予想している。見事、劇的な帰還を果たせるか、楽しみである。